

「……今日、部活でちょっと揉めた」

背中越しに、乾いた声がする。
腰だけが、ゆっくりと沈んでは浮く。

「なんか、空気が悪くなっちゃってさ……」

気の利いた言葉は出てこない。
ならばと、かわりに腰を浅く突き上げ、
膣内射精で応える。

びゅるっ……びゅるるっ……

「……んっ。今の、慰めのつもり？」

カズサは息をひとつ吐いて、苦言を続ける。

「射精じゃなくて、言葉で慰めて……あ」

途中で声が途切れた。膣がきゅつと締まる。

「……私も、イキそう」

小さく腰が震えて、彼女自身も軽く絶頂した。



上半身だけ脱がせて、体勢を変えた。
後ろから腰を掴み、突き上げる。

ぱんっ……ぱんっ……

薄い尻が下腹部に当たる音が、部屋に響く。

「……先生、頑張ってるね」

カズサは顔をシーツに埋めたまま、乾いた声で答える。
落ち込みは消えていない。
それでも、突き上げるたびに奥が小さく締まってくる。

「今、中に出されたら……結構、大きくイケそう
それで、少しは……気分、変わるかも」

自分でそう言っ、彼女は膣をきゅっと絞った。

精を搾るための締め方だ。
射精感が一気に下腹へ押し寄せる。



カズサの尻を両手で掴み、根元まで押し込む。
そのまま、限界まで溜めていたものを一気に放つ。

びゅるっ………！

びゅるるっ………！

カズサの背中が弓なりに反り、
短く高い声が漏れる。膣が脈打って、
残っていた精まで搾り取ってくる。

射精が収まったあと、横顔を見ると、
さっきより少しだけ表情が明るい。

この様子なら、部活の子達とも、
きつと仲直りできるだろう。

「……ありがと。ちよつとすつきりした。
今度は、先生が好きなようにしていいよ」

カズサは振り向かないまま、低い声で続ける。
出した精が潤滑になって、結合部がさらに滑る。





